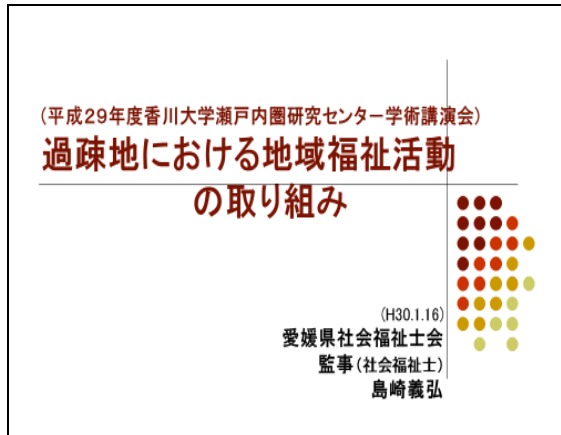


過疎地における地域福祉活動について

愛媛県社会福祉士会 監事 島崎義弘



愛媛県社会福祉会の島崎と申します。よろしくお願ひいたします。私は合併前の地名で言えば、今治市の関前村という島の出身です。関前諸島の岡村島という所で小学校、中学校時代を過ごしました。現在、獣医科大学で有名になっている今治市の高校に通い、大学は仙台の東北福祉大学で福祉を学びました。大学卒業後に今治に帰って来て、障害児の施設。それから、関前の島の役場に 20 年間勤務をしておりました。その時に、福祉の当事者でも

ありましたので、今日、この学術講演会に来ておられます香川大学の太西先生には保健指導などでいろいろと世話になりました。それから、私事ですけれども、私の娘が香川大学の教育学部にお世話になったものですから、「香川大学はすごく思い出深い大学だ」と思っています。

今日のレジュメですが、私は離島というよりも過疎地のことが重点になると思っていましたので、中山間地域の内容をかなり入れていました。ところが、今日、太西先生とお話をしていたら、むしろ離島の医療や福祉の方がクローズアップされているということが分かりました。そこで、もう一つ持ってきたパワーポイントを用いて、どちらかと言えば島の方を中心にお話をさせていただこうと思っております。

今、私達、福祉の世界では地域福祉が大事と言われてます。阪神大震災以後、地域の中の助け合いということが認識されるようになりました。また、今、関前の岡村島などに移住者が少しずつ増えてきております。愛媛県の今治市に地域おこし協力隊の人達がたくさん来ていただいております、その方々が島に移住をして島おこしをして下さっています。

私達の分野では、社会福祉法という「法律のもとでしっかりと地域福祉を推進して行こう」というフォーマルなサービスと「地域における新たな支え合い」というインフォーマルなサービスなどがあります。そういった中で、「行政と住民団体、ボランティア、NPOの人達とこれからの島をいかに作っていくか」ということが課題となっております。

地域福祉という考え方

私たちは、生まれてから死を迎えるまでの生涯を通して、多かれ少なかれ、必要に応じて他者の助けを得て問題を解決しながら生きています。その助けが法律などによって制度化されたフォーマルなサービスである場合、あるいは家族、友人、近隣住民などによるインフォーマルな支援である場合、また、市場で購入するサービスなどがあります。

地域福祉という考え方は、私たちの暮らしを人間らしく豊かにしていくために、人間が態度として創り出した「助ける」「助け合う」という相互の関係にまで高めあう仕組みとして人間の生活史のなかで造り出されたものです。

地域福祉の推進

社会福祉法

第4条(地域福祉の推進)

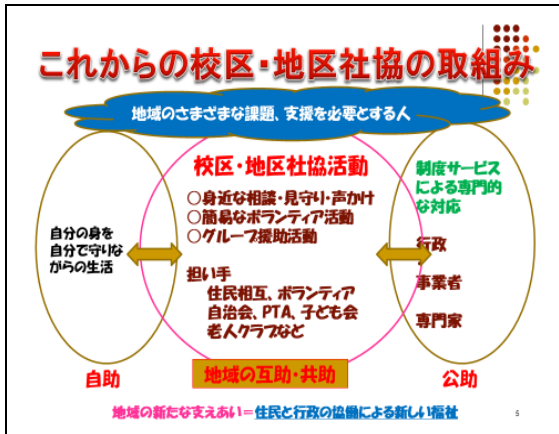
地域住民、社会福祉を目的とする事業を経営する者及び社会福祉に関する活動を行う者は、相互に協力し、福祉サービスを必要とする地域住民が地域社会を構成する一員として日常生活を営み、社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会が与えられるように、地域福祉の推進に努めなければならない。

地域における「新たな支え合い」

地域で生活するうえで生ずるさまざまな生活課題への対応は、まず自助で行われます。(しかし、家族規模の縮小化が進み、特に高齢の単独世帯や高齢者が世帯主である夫婦世帯が増加し、自助機能は弱くなっています。)

以上の状況から、地域に「新たな支え合い」として共助が大切になってきます。(行政と住民団体、ボランティア、NPO法人などの多様な民間主体の連携が大切でしょう。)従来、行政が担ってきた役割に加え、決め細やかな活動により地域の生活課題を解決することであり、この意味で共助の仕組みと思われます。

このため、私達は下図の自助の部分と公助の部分の真ん中の地域の助け合いというところで、今、実践事例として大学、地区社協、地域住民などと地域福祉の推進に取り組んでいますので、報告させていただけたらと思います。



地域生活を支援するためには

ソーシャルサポートネットワーク

誰がネットワーキングやネットワークマネジメントするかをシステムとして明確にすること

今、今治市の人口は16万5千人ほどです。愛媛県には合併前に70市町村ありましたが、合併後に20の市町になりました。全国的に合併が推進されたのが愛媛県、広島県、長崎県です。同じ共通キーワードは島が多いということでもあります。合併前は今治市が真ん中であって、11の町と村がありました。私が生まれ育ったのは、この関前という所です。関前の岡村島、大下島、小大下島が今治市と合併して一つの島としてみなすようになりまし

た。ただこの合併のスタイルが対等合併だったので、それぞれの支所機能や社会福祉協議会などが関前に残りました。そして今、私は社会福祉協議会の職員になっており、「しまなみ海道」を軸としながら島の支援をしっかりとやっていこうということです。

愛媛県今治市概況



今治市は、愛媛県の北東部に位置し、瀬戸内海のほぼ中央部に突出した高純半島の東半分を占める陸地部と、芸予諸島の南半分の島嶼部からなります。緑豊かな山間地域を背景に、中心市街地の平野部から世界有数の多島美を誇る青い海まで、変化に富んだ地勢となっています。平成17年1月16日 今治市および越智郡11町村の新設合併により、新たに「今治市」発足。これにより、愛媛県から村が消滅。

今治市の代表的な産業に造船とタオルがあります。注目する点として外国人がいることです。今治造船などいろいろな造船会社や海運会社があり、その担い手として外国人が働いています。タオルの製造業などにも外国人の方が働いています。現在、伯方島の人口は6千5百人なのですが、外国人が3百人もいます。このように外国人がキーワードになっています。

私が生まれ育った岡村島には「しまなみ海道」から渡って行けません。船で今治港から行くしかありません。広島からは「とびしま海道」という島伝いに架かった橋があり、この海道を通って行くこともできます。

少し見え難いですが、これが今治市のデータです。去年の3月で人口が16万2千人、世帯数が7万6千という状況になっております。高齢化率が33.6%です。

すごいのは、私が住んでいる所は人口が450人ぐらいで、高齢化率が70%ほどの島々です。今治から大島、伯方島、大三島とだんだん遠くに行くほど高齢化率が高くなっているというような所です。大三島の隣が生口島です。今治から尾道までは「しまなみ海道」が通っており、車で50分ぐらいです。そして、関前や大三島の島々に住んだ移住者はカフェを開いたり、イノシシを使ったジビエ料理などを作ったりと、新しい産業を興しています。

合併して1年間、私は今治市職員でしたけれども、今は社会福祉協議会地域福祉課職員として勤務しております。この社会福祉協議会は合併して職員が456名になり、四国で2番目に大きい社会福祉協議会だと言われております。1番大きいのは高松市の社会福祉協議会です。今治市社会福祉協議会は職員が多く、「誰もが安心して暮らすことができる福祉のまちづくりを推進する」という使命を持っています。

今治市基本情報 (H29.3.31)

項目	数値	県内割合
人口	162,835人	
世帯	76,206世帯	
平均世帯人員	2.14人	
世帯構成	単独世帯	20,966世帯 27.5%
	核家族世帯	38,513世帯 50.6%
	夫婦のみ世帯	16,464世帯 21.6%
	夫婦と未婚の子のみ世帯	16,410世帯 21.5%
	ひとり親と未婚の子のみ世帯	6,039世帯 7.9%
	三世帯世帯	3,599世帯 4.7%
	その他世帯	12,126世帯 15.9%
	高齢者世帯(65歳以上)	19,491世帯 25.6%
	一人暮らし(高齢者世帯)	8,362世帯 11.0%
	母子世帯	5,650世帯 7.4%
世帯類型	父子世帯	919世帯 1.2%
	その他の世帯	50,076世帯 65.7%
	自治会	805
	自治会参加世帯	57,264世帯 75.1%
65歳以上人口	生活保護受給世帯	1,502世帯 19.7%
	65歳以上人口	54,673人 高齢化率33.6%
	単身世帯世帯	8,340人 65歳以上の15.3%
	専業主婦世帯	2,890人 65歳以上の5.3%
	高齢者世帯	6,556人 65歳以上の11.4%
	認知症高齢者	3,309人
	認知症高齢者	1,310人 A-D 170人 E 91.8人
	精神障害高齢者	1,117人 A-D 110人 E 91.7人
	身体障害者	7,908人 A-D 110人 E 91.7人
	民生児童委員	398人 1人暮らし212世帯
民生児童委員	主任児童委員	53人
	副主任	678人
	児童相談員	255人

社会福祉法人今治市社会福祉協議会

昭和26年設立。合併 平成17年1月
理事15名、監事2名、評議員30名
職員数456名

○本部(総合福祉センター“愛らんど”)
①地域福祉部 地域福祉課・相談支援課
②介護事業部 居宅介護課・訪問介護課
③総務部 総務調整課

○支部 11支部(旧町村ごと)



使命「誰もが安心して暮らすことのできる福祉のまちづくりを推進する。」

経営理念

- ①住民参加・協働による福祉社会の実現。
- ②地域における利用者本位の福祉サービスの実現。
- ③地域に根ざした総合的な支援体制の実現。
- ④地域の福祉ニーズに基づく先駆的な取り組みへのたゆみのない挑戦。
- ⑤安心を支える在宅福祉サービスの安定した経営。

それぞれの支部を残しながらの対等合併でしたので、例えば、お風呂のセットを積んでホームから島々まで行くというように、同じ市民として、島民にも在宅サービスをしっかり提供しようというのが、私達、社会福祉協議会のコンセプトです。

ちなみに、お隣の呉市ですが、大崎下島、豊島、上蒲刈島などは対等合併ではなくて、吸収合併でしたので、社会福祉協議会の支部機能がほとんどないというような状況です。

このため、社会福祉協議会のサービスを合併時に全部他法人にお願いしたという経緯があります。

一方、今治市社会福祉協議会がなぜこれだけ大きくて、多くの職員数を抱えているのかというと、対等的にしっかり福祉サービスを島でもやっていきたいというのが私達の願いであり、大島にも伯方島にも大三島にもそれぞれ拠点があって、デイサービス事業とか、訪問事業、ホームサービス事業などをやっているということでご理解をいただいたらと思います

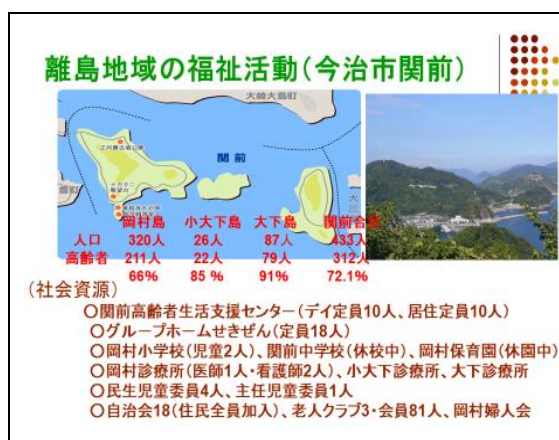
それでは、私が 24 歳の時に村役場の職員になった関前という所をクローズアップして見てみたいと思います。ここには岡村島、小大下島、大下島があって、去年の 4 月現在で人口 433 人です。高齢化率が岡村島 66%、小大下島 85%、大下島 91%で平均すると 72.1%です。

関前には社会福祉協議会の拠点として関前支部があります。ここではデイサービスセンターとしてヘルパーさんが高齢者の生活支援

を行っています。この隣に認知症の方の「グループホームせきぜん」があります。このグループホームは平成 17 年 1 月の合併の 1 年前に関前村役場が呉の法人を誘致したもので、土地を無償貸与してグループホームに来てもらったものです。

関前には岡村小学校があり児童 2 人が通っています。今、関前中学校は休校中です。保育園も休園中です。岡村診療所がありドクターが 1 人と看護師が 2 人います。小大下島と大下島には出張診療所があります。ここには岡村島から週 1 回ドクターが船に乗って通っています。そして、民生委員が 4 人、主任児童委員が 1 人。それから、自治会が 18 人。3 つの老人クラブと婦人会があります。

私は 24 歳の時に島の役場に就職しましたが、その時に、まず言われたのが「船の免許を



取ってほしい」ということでした。それはなぜかと言うと、急患が出た時に岡村島のお医者さんを小大下島や大下島に運んだり、保健師さんの保健活動で運んだりする時に船の免許がないといけないということで、船の免許を取りました。

私が役場に入った当時、関前には1,600人ほどいたのですけれども、25年から30年経つと、433人ほどに減ってしまいました。当時は産業として役場の職員が一番多いという状況でした。あとは農業職員、漁業職員でした。合併したら島の人達も異動してしまったというところに、合併による行政の体制も変わりました。

小大下島は石灰石が取れ、浅野セメント、日本セメントがあったので、昭和40年代、50年代には、この3つ島に3千人ぐらいいました。その小大下島は今26人ほどになっています。ほとんどが70代、80代の方ですけれども、消防団活動を一生懸命やっています。「集まれと」言えば、皆が「号令1,2,3」と、倒れそうなのですけれども70代、80代の人々が主役でやっています。ですから火事は1件もありません。それだけ皆が緊張感を持って生活をしているというのが、この小大下島です。

合併してから関前のドクターで対応できないようなSOSの時には伯方島から救急艇が来ます。伯方島から救急艇が来るのに約30分かかります。それから今治港まで運ぶのに約30分かかります。また、ヘリポートがあってドクターヘリが来ることもできます。一方、隣の呉市から救急車に来てもらうことも考えられます。ところが、県境を越えることが難しいのです。そこで協定を結んでおき、緊急の場合に対応できるようにしようとしています。

旧関前村の時の村長の大きな役割は、まずお医者さんに来ていただくことでした。それから、水道、それと船です。合併した後も市営のフェリーが残っており、今治港まで通っております。水は今まで淡水化装置でしたが、昨年水道が橋を伝って広島から来ています。これは画期的なことで、県域を越えて水道が来るということは、とても大事なことだと思っています。今、島はこのような状況です。

私は関前村役場の職員だったころから、行政とは違う住民主体の地域福祉活動が大事ではないかと思っていました。役場の職員になったのが、昭和63年ですが、平成2年の4月に社会福祉法人として社会福祉協議会を立ち上げさせていただきました。

そのあと、在宅福祉サービスの拠点がなかったのが、愛媛県庁に行って「老人ホームが欲しい」と掛け合ったのですけれども、「人口規模の点で無理」ということで

社会福祉法人関前村社会福祉協議会のあゆみ	
● 平成2年4月	社会福祉法人として厚生省より認可される
●	社会福祉法人関前村社会福祉協議会発足
●	事務所: 関前村役場内
●	初代会長に矢野芳人氏就任、事務局長・福祉活動専門員配置
●	ホームヘルパーサービス事業開始(行政庁舎から事業継続)
●	心配と相談所開設
●	W(福祉)・H(保健)・M(医療)モデル事業開始(3年間事業)
● 平成3年5月	2代会長に池田深氏就任
● 平成3年8月	関前村高齢者生活福祉センター事業受託運営開始(愛媛県初)
●	老人デイサービス事業開始
● 平成4年3月	「安心して楽しく老いるシンポジウム」開始
● 平成6年4月	配食サービス事業開始
● 平成7年7月	「タイムタラーボランティア「だんだん」(地域通街)事業」開始(日本初)
● 平成10年4月	ひまわりサービス(郵便局共同事業)開始
● 平成11年4月	ケアタウン事業開始
● 平成12年4月	介護保険制度移行により、関前村より訪問介護事業・通所介護事業を受託して実施
● 平成13年	自分史事業開始、「だんだん」の事業の一環で「サロンきないや」開始
●	大学フィールドワーク体験学習開始
● 平成15年2月	ジュニアシンポジウム事業開始(岡村小学校・日吉小学校)
● 平成15年5月	3代会長に榎垣哲氏就任
● 平成16年4月	関前村社会福祉協議会の事業として介護保険事業指定を受けて、訪問介護事業・通所介護事業を開始
● 平成17年1月	社会福祉法人関前村社会福祉協議会解散
● 平成22年2月	被災教室事業
● 平成22年5月	大下地区郷土料理交流事業(どんづり交流)
● 平成23年4月	介護事業・通所介護事業、基準該当サービス開始
● 平成26年8月	小大下島「しましまサロン」(広島国際大学生)開始
● 平成27年	地域おこし協力隊「歌声喫茶サロン」(まるせきカフェ)開始

した。そこで、デイサービスセンターにケアハウスのような施設が付いた高齢者生活福祉センターを愛媛県で初めて設置しました。実は厚生労働省が日本で 400 ヶ所の高齢者生活福祉センターを設けたいということで、さっきの「とびしま海道」の大崎下島と豊島にも同じような施設が平成 3 年、平成 4 年にできました。

それから、関前村は高齢化率が 42%と全国で第 3 位だったのです。私達は地域住民主体の考え方をもっとしっかりとやっていこうということで平成 7 年に地域通貨事業を始めました。地域通貨はアメリカのマイアミで行っていて、「お金を使わないで、お互いに助け合いましょう」と言うものです。例えば、岡村島にはタクシー会社がありません。おばあさんが港まで行くのに車がないという場合に、若い人がおばあさんを車で運んであげると、必ず次の日に 5 千円とか、1 万円とかのお金を持って来るのです。そこで、「だんだん」という地域通貨を用いることで、お互い様という形でやりましようというものです。逆に若い人は何をしてもらおうかという、おばあさんが得意な早や起きのモーニングコールです。役場の職員が出張に行く時は、おばあちゃんにモーニングコールのサービスをしてもらうというようなものです。私もしてもらいました。本当の話なのですが、おばあさんは眠れなくて、朝の 4 時から電話を掛けてくるのです。「起きている?」と言って。そういう逸話があります。

平成 10 年に「ひまわりサービス」を開始しました。郵便局による一人暮らしの高齢者の見守りサービスです。当時、国のほうでは郵政事業を民営化しようとしていました。この動きに対して、郵政民営化をしないようにということで郵便局が住民の理解を得るため、民営化の前に福祉サービスを展開した時期があり、その一環です。

また、平成 11 年からケアタウン事業ということで、郵政省がサービスとして離島・過疎地に無償で車椅子や杖などの介護機器を提供しました。

平成 12 年、西暦 2000 年に日本の福祉を大きく充実する介護保険制度ができました。これにより、私達の島でも訪問介護サービスとデイサービスを行政が主体になり、社会福祉協議会が受託して行うようになりました。

平成 13 年から自分史事業というものを開始しました。これは子供達が高齢者の家に行って、お話を聞き 1 冊の本にして高齢者にお返しするというものです。

平成 13 年 7 月から大学フィールドワーク体験学習が始まりました。関前村社会福祉協議会が全国の大学生、特に福祉系の大学の方に来ていただき、フィールドワークの中で住民座談会をしたり、交流事業をしたりしています。今は社会福祉の実習生が 1 か月間家を借りて、そこで共に生活をしながら行っています。川崎医療福祉大学や広島国際大学、かつては神戸学院大学の学生達も来ています。放送大学の先生などにも来ていただき、島に若い人に来てもらっての交流人口を増やしていこうというような活動も活発に行っています。

合併が平成 17 年でしたけれども、2、30 人しかいない小大下島にも 2 か月に 1 回、ずっと広島国際大学の学生が来てくれています。そして、自分達でプレゼンテーションを行い、助成金を得て「しましまサロン」というサロン活動を行ってくれています。これらの活動

は大学の先生も一緒に行っていただいております。また、地域おこし協力隊の成田さんという東京出身の40代の方が、ご夫婦で「まるせきカフェ」という喫茶店を岡村島で始めました。ここも新しく高齢者の方のたまり場になっております。

これはミニ運動会です。島の人達が千500円ずつ出して、全員集合で運動会を行っています。住民主体の活動ですけれども、すごいですよ。皆が1列ずつになってボールを渡して行くボール運びゲームなどメニューが5つぐらいあって、島の人達はドミノ倒しののように倒れて死ぬのではないかと思うぐらい張り切ってやるのです。そのぐらい学生が来ると元気になります。これは広島国際大学の3人の女子の実習生です。将来、この人達は社会福祉士になっていきます。ソーシャルワーカーになっていきます。ということは広島や大阪の老人ホームの職員になったり、市役所の職員になったりします。



(関前での地域福実践からの学び)

①関前塾や地域通貨ボランティアグループ「だんだん」などによる福祉学習(内なる力⇒内発力)

②島外の方々を柔軟に受け入れる土壌(外なる力⇒外発力)

③内なる力と外なる力の融合⇒新しいコミュニティの創造

学生たちはこの島で高齢者の暮らしをしっかりと体験をするということです。食事也十分に作ったことがない学生が家を借りて生活をする。要するに、ソーシャルワークの前提となる島の生きざま、高齢者の生きざまをここで学ぶということです。それを島の人達が学生に教えています。

この写真は成田さんが島おこし協力隊として、まず市役所の職員として3年間経験して、そのあと古民家を借りて、このような「まるせきカフェ」というカフェをやってくれています。ここは2カ月に1回ほど社協型のサロンとして、地域の人々の寄り場になっています。そこに介護予防の視点で学生に来てもらっています。皆さんとても元気です。だいたい来るのは女性ですが、イベントには男性も結構参加をしています。

「関前塾」や地域通貨の「だんだん」などの活動をしながら、島外の方を柔軟に受け入れる土壌作りが大事なのです。要は地域住民だけで行うには限界があるので、いかに外の方々の支援、外なる力を受け入れるかが大事です。このためにも、外の人に「来てくださいね」という柔軟な受け入れの土壌作りをしていかなければなりません。そうでなければ、東京や大阪から来られた方々との友好が難しいということです。そこで、福祉学習をしながら、そして地域通貨などで助け合ながら内部の力を高めるとともに、外なる力をいただいて内なる力と外なる力を融合させることによる新しいコミュニティの創造が今後の島作りのポイントになるのではないかと考えています。

今、全国の若い人達が瀬戸内海の離島にすごく興味を持っております。でも、島の人達が「島に来ていただき、ありがとうございます」と思わない限り、なかなか新しいコミュニティができません。そこで私達ソーシャルワーカーが地域の社会福祉活動として、しっかりとマネジメントしていかなければならないと思っております。

このあたりをもう一つのパワーポイントを用いて、少し詳しく紐解いていきたいと思えます。

これは少し古い資料ですが、関前の人口は平成 24 年に 540 人でした。人口動態を見ると、平成 13 年に 902 人いたのが平成 23 年に 586 人。そして、現在 450 人です。高齢化率も右肩上がりに上がっています。

安心して老いる島づくり H24「関前塾」



関前地域



関前人口等動態

	H13年4月1日	H18年4月1日	H23年4月1日
人口	902人	713人	586人
世帯数	450世帯	387世帯	346世帯
65歳以上人口		381人	343人
高齢化率		53.4%	58.5%

図は平成 23 年の社会資源です。450 人しかいないコミュニティですが、対等合併でしたので、保健師も 1 人きちんと配置しております。社会福祉士が社会福祉協議会のソーシャルワーカーとケアワーカーの 2 人。介護福祉士が 3 人。施設は高齢者福祉センターとデイサービスの併設、およびグループホームということです。診療所は岡村島、小大下島、大下島の 3 か所です。興味深いことに関前には火葬場が 3 つありあります。岡村島、小大下島、大下島にそれぞれ火葬場があつて、最後は生まれ育った所で、皆で送るということです。ここに「1 つのこだわりがあつたのかなあ」と思っています。

関前社会資源

施 設	利用数等	(H23. 4月現在)	
		専門職	人数
保育所	7人	医師	1人
小学校	7人	看護師	4人
中学校	7人	保健師	1人
高齢者福祉センター	1箇所(9人)	社会福祉士	2人
デイサービス併設	1箇所(10人)	介護福祉士	3人
グループホーム	1箇所(18人)		
診療所	3箇所		

右の立派な写真は一階が小学校です。そして、二階が中学校。15 年ほど前には、まだ児童が 70 人ぐらいいたのですけれども、今では 2 人になってしまいました。このような島の資源を「何かに活用できないか」と思っています。今、島々にはこのような施設が結構あります。「これをどう活用していくか」、大学の皆様とも考えながら進めています。「福祉コミュニティの拠点や観光資源に使えないか」など、いろいろ考えているところです。



左が高齢者生活福祉センターの生活支援ハウスの概要です。右がジュニアシンポジウム事業の説明です。合併前から「1 つの市民になる」ということを意識して、今治の市街地のど真ん中の学校・日吉小学校と島の学校・岡村小学校との交流を進めてきました。



③利用料

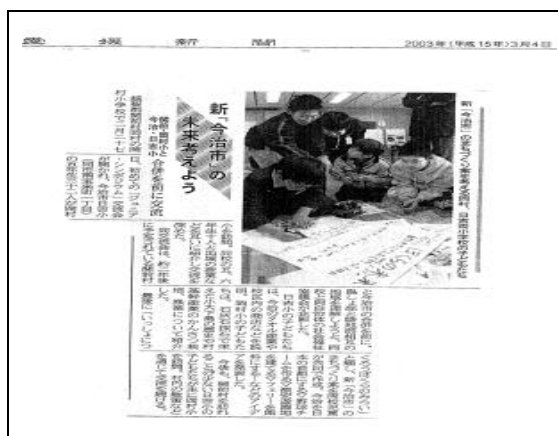
1年間の総所得が120万円未満の方は部屋代が無料となります。
(最高でも月額5万円まで)

光熱水費については、入居者の実費負担になります。

**・ジュニアシンポジウム事業
(地域間交流活動)**

関前・岡村小学校と今治・日吉小学校の交流活動。お互いに地域の文化や社会資源の紹介等を行いながら、交流を通じて、自分たちの住む地域や市内各地への理解を深めるとともに、児童同士の繋がりを大切にしています。将来の今治市の未来都市を創造していくシンポジウムとして実践しています。

このジュニアシンポジウムは平成 17 年の合併前から行われていました。新聞記事は平成 15 年のものです。「子供達が自分たちの地域を紹介し、子供達に新しい今治市に向けての町づくりの案を話し合って作成してもらう」といった活動です。このような福祉教育を行っておかないと、いきなり行政合併した後で市民が交流するのは難しいということで行いました。



島々の老人クラブ加入率は 80%とか 90%です。それだけ島の人達の繋がりが大きいのです。特に、大三島の上浦という所は、65 歳になったらご近所のリーダーがすぐに老人クラブへの入会手続きを持って行くというシステムができています。老人どうしの繋がりが住民と仲良くすることがすごく大事です。毎年、

市役所から老人クラブにいただけるお金が削られているのですが、大三島の老人クラブでは、自分達がお金を出して講師を呼び、「どのようにしたら転倒しないか」、「どのようにしたら認知症にならないか」など、勉強会を行っているのです。それだけ主体性が強く、コミュニティがしっかりしています。一方、陸地部の人達のコミュニティですが、島のように繋がりが強くなく、合併後の大きな課題として私達も苦勞をしているところです。

それと、医療の問題です。今治市の島々には小児科医師がいません。伯方島の人口は、6,500 人程おりますが、結構子供が多く保育園なども満杯です。小児科の病院に行くのに橋を使わなくてはなりません。しかし、「しまなみ海道」は通行料が高いのです。ですから、「島で子育てをするとすると、陸側に比べ生涯で 1 千万円ほど違うのではないか」と言われています。この伯方島で子育てをしたいという若い人達がいるのですが、社会資源、特に病院などが充実していないという問題もあります。このため、「子育てにも影響が出てきているのが事実だろう」と思っております。

もう一度、関前の島に話を戻しますけれども、さっき言っていた自分史というのはこれです。高齢者の所に子供達が行き、お話を聞いて 1 冊の本にして渡すという事業です。実はこの自分史を持って来れば良かったのですが、A さんという方がいて、その自分史を見てびっくりしたのですけれども、私が生まれ育った岡島村に銀行があったり、アイスクリーム屋さんがあったりしていたのです。私も知らないことを高齢者が語ってくれるのです。それらをしっかりと子供達が受け継いでいくということ、このことがすごく大事だと思います。

この人は漁師です。毛糸で大きな鯛を釣る方法を教えているのです。漁師はこのようなことをあまり教えないのですが、子供達にはしっかりと教えています。また、「広島に原爆が投下された時、そのキノコ雲を見たよ」とかですね。命の大切さというものもそこで教えているのです。

これはうちの息子です。今、24 歳です。今年の春から社会人ですが、きっと心の中に、この高齢者達の思いがきちんと伝わっているのではないかと思います。この自分史という事業はお金をかけないで、このような縦の関係を私達がしっかりと作っていくことができます。そして、一つの家族を作ることができます。島の中で「何々ちゃん」と呼び合える

今治市の位置・地勢

・ 位置・地勢

今治市は、愛媛県の北東部に位置し、瀬戸内海のほぼ中央部に突出した高縄半島の東半分を占める陸地部と、芸予諸島の南半分の島しょ部からなり、緑豊かな山間地域を背景に、中心市街地の位置する平野部から世界有数の多島美を誇る青い海原まで、変化に富んだ地勢となっています。



・ 自分史事業（世代間交流活動）

一人暮らし高齢者等と児童との催し物を通しての交流活動。児童からの歌や人形劇等の披露や、高齢者から昔の遊びを教わったり、戦争体験や昔の生活の様子を聞きながらその人だけの自分史を作成します。



これは新聞記事ですけれども、自分史づくりで世代間交流をしていくことにも地域通貨のタイムダラーを活用しています。タイムダラーの理念は「交流を通じて信頼性をはぐくみ、お互いに支え合う地域の新しい形を目指す」というもので、自分史づくりの理念にも合っています。アメリカ・マイアミのタイムダラーをなぜ導入したかという、アメリカは移民の国なので、マイアミの所得の低い人達はお金を使わずに、タイムダラーでお互いに助け合っているそうです。一方、島の人達があって、「助けて」と簡単には言えないので指そうとしていました。ちょうどその当時、地域通貨タイムダラーを広げていこうとしており、これは新聞記事です。



写真が実際の地域通貨「だんだんチップ」です。「だんだん」というのは「ありがとう」ということです。これはお金でなく、30分間何かをしてもらった時に1枚を渡すというものです。弁護士さんであっても、おばちゃんであっても、30分間何かをしてもらったら1枚渡します。おばあちゃんに草むしりをしてもらっても30分間で1枚です。能力差ではなくて助けてもらった時間に対して渡すというもので、皆さん同じ「だんだん」の会員、お互い様の会員、お互い様の地域に集うという考え方です。



右図がだんだんの会員カードです。車で運んでもらう、モーニングコールをしてもらう、猫さんやワンちゃんを飼っているのだけど東京に出張するので見てもらう、ベビーシッターをもらう、簡単なものを直してもらう、パソコンの操作をもらうなどのサービスメニューが書かれています。

[illegible]

地域通貨は病気で倒れたときに助けてもらったことから、エドガー・カーンという先生がアメリカのマイアミあたりで始められたそうです。移民の国で助け合うシステムを作ろうということから始まっています。日本人、特に島では「助けて」と言うのが苦手なので、これ 1 枚で「お互いさまよね」として助け合うしくみを作りたいというのが、私達の行ってきた活動でもあります。

そういうことで、「だんだん」によって、写真のようなサロンができて、高齢者から子供達まで一つの家族として、サロン活動などを展開しております。ここは「きないや」という民家を改修して作った皆がくつろげる寄り場です。特に、介護予防は厚生労働省が昨年の平成 29 年から介護保険の総合支援事業の中で「これからは、いかに介護予防の充実の視点をしっかりとやっていくか」ということを言っており、いろいろな社会福祉協議会でも 3、4 か所ほどサロンができました。今、そこに力を入れています。

・いきいきサロン活動

ボランティアと小学生から高齢者等が協働して企画し、内容を決め、運営していく楽しい仲間づくりの活動。



縁側サロンというか、高齢者の居場所づくりをしっかりとしながら、閉じこもり予防や。仲間作りなどをしっかりやっていきたいと思っています。

これが関前の島の風景です。20 年ぐらい前にはこのように、小学生もいたのですけれども、今は 2 人になりました。どちらかというと島の人口よりも猫やイノシシの数の方が多くなって、島に人がいなくなってしまうました。その中で地域おこし協力隊の人達が頑張ってくれています。島に 3 人の地域おこし協力隊が奥さんや子供達を連れてきてくれて、島を活性化していこうとしています。

縁側サロンから育むもの



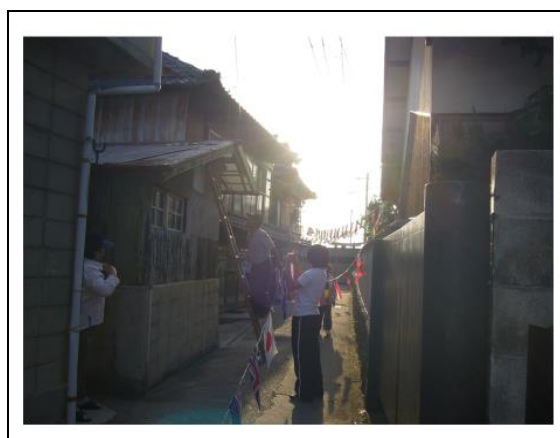


これは 25 年ほど前の写真です。今は運動会もなくなりました。この運動会の復活をどうするか。それとお祭りが問題です。お神輿^{みこし}を担げないという大きな問題があります。9 月 23 日に秋祭りがありますが、今は「しましまサロン」に来てくれている広島国際大学の学生達が神輿を担ぎにだけに来てくれており、共に地域の文化を継承していただいています。もう一つは 2 月 17 日に海祭りという海祈^{みことう}禱が鎌倉時代からあります。こちらにも以前英語の教員としてニューヨークから来ていただいていたシネル・フリッツプさんという方が毎年来てくれております。ということで、今は島の人達だけでなく、このように島外の人達も島の文化を継承してくれています。

祭りの時は、学生達がお手伝いをしていています。これは神戸学院大学の学生さんです。学生達は実習の中で 1 か月間、民家を借りて島で生活をしています。このように住民と共に島の暮らしを学ぶことが、すごく大事



です。今、彼女はNPOに参加して、海外で活躍しています。このようなことがきっかけになりました。



福祉の視点で私達が活動をしているというところをご紹介します。この実習生は小大下島で1か月間お世話になって、最後にライブをやってくれました。そして、ギターを持って1軒1軒歌って回りました。そして、島の人達が見送ってくれたということです。ここには松橋さんという自治会長がいて、そのお宅にホームステイをしていたのですが、1週間ぐらいいや、「もう、こいつら帰ってくれ。酒ばっかり飲んで困るわ」とか言っていたの

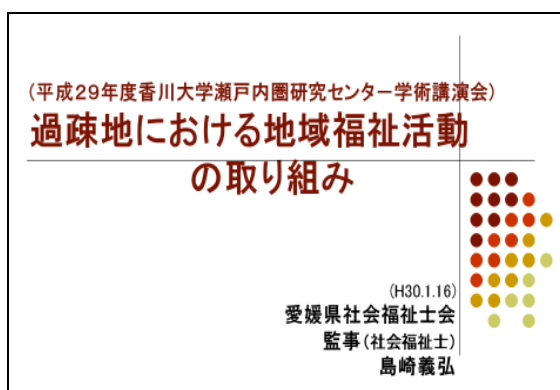


ですけれども、何とか1か月間の実習を終えて、今、彼はこの実習を機に大手の企業に就職したそうです。このように実習の体験が良かったということでもあります。

今日は用意してきた資料が過疎地の内容でしたけれども、離島、特に関前を中心にお話をさせていただきました。

中山間地域の事例としては、道後温泉の隣に玉川鈍川温泉があります。ここは中山間地域で、お猿さんが出て来るとか、イノシシがうろろしているような地域です。私達はその過疎の状況の中で地域住民の拠点がなくなって困っているということを住民座談会でキャッチしました。特に店が閉鎖してJAのスーパーがなくなり買い物ができないという大きな問題が出てきたということです。このことは

「地域を活性化させるためにどうしたら良いのか」と言うことでもあります。私達はそこを



何とか支援をしていこうということで、まず、サロンを立ち上げて学生さんを受け入れるとか、若い人に来てもらおうということになりました。

それで、平成 17 年にスーパーがなくなり、拠点がなくなったということから、平成 20 年にサロンを立ち上げました。ここが JA の鈍川店だったのですけれども、これが閉鎖してどうしようもなくなったということから、サロンをしてきていた 15 人の女性の世話人さんが 2 万円ずつ出資し、30 万円で、「ふれあい茶屋」を作りました。



(事例・過疎地の地域福祉活動) 今治市玉川町



(活動拠点：今治市玉川福祉センター)

町の中央部を二級河川の蒼社川が流れている。中流域には玉川ダムがあり、蒼社川は今治市の上水道としての役割を担ってきた。伊予三湯の一つ、アルカリ単純泉の鈍川温泉があり、観光産業も盛ん。過疎高齢化が進んでいる。

(福祉事業)

- 地域福祉活動、地域包括支援センター、子育て支援センター、訪問介護、外出支援事業

(H29年3月末)

○玉川町人口 5,163人、高齢者人口 1,975人、高齢化率 38.3%

○鈍川地域人口 390人、高齢者人口 201人、高齢化率 51.5%

鈍川ふれあいサロン(H20年)



- 平成20年7月22日立上げ 頻度 2か月に1回
- 参加者負担100円→300円(参加者の要望)
- 社協補助金上限 100円×15名×12カ月

25

これが「ふれ愛茶屋」のオープンの写真です。ここは男性を大事にするサロンです。なぜかという、JA の支店がなくなったので、男性の寄り場がなくなりました。JA の支店は農作業をしている人達が肥料を買いに来たり、情報交換をしたりするたまり場だったので。そこで、男性にもここに来てもらおうということです。

これがスーパーで、これがレストランです。

週 3 回、火曜日、木曜日、土曜日に「ふれ愛茶屋」をオープンしています。

ふれ愛茶屋がオープン (生活支援の拠点)



- 平成21年10月1日、ふれ愛茶屋がオープン
- ふれあいサロン・ふれ愛茶屋の2つの体制で運営

サロンの様子(現在)



ふれ愛茶屋の様子

・生活
物資購買、宅配発送の取次、肥料等の受け渡し、食
事の提供(会食の場づくり)



- ふれ愛茶屋 営業日 火・木・土曜日
- ふれあいサロン 開催日 偶数月第2月曜

このおばちゃん達は新聞などいろいろなマスコミに取り上げられて有名になっています。そのおばあちゃん達は「まんてん焼き」というオリジナル商品を作りました。これは川崎医療大学の学生さん達です。ふるさと料理などを学びながら、住み込み実習をしています。

学生達がここで実習をして、「毎日型のサロンが必要でないか」ということを提案してくれました。それを受けて毎日型のサロン「ふらっとほっと」がオープンしている様子です。

新聞にも掲載



広報今治



- 2013/3/1広報今治の表紙に掲載される。

相談援助実習(社会福祉士実習)

実習生が約1か月間民家を借りての地域滞在型実習を行うことにより、生活体験を通して「地域福祉活動の理解と実践力」を養うと共に、地域行事に積極的に参加し地域福祉づくりに貢献しています。



毎日型の休息サロンへ発展(H25年10月)

(気軽に寄れる地元高齢者とサイクリストのサロン)

「2か月に1回のサロンでは物足りない」と言う声や、マスコ等によりふれあい茶屋が有名になり多くの観光客が来場し、地元の高齢者が気軽に来れなくなった。また、多くのサイクリストの方が来られるがいつもの曜日で休息する場所がない等の理由から、ボランティアスタッフが話し合い新しいサロン「ふらっとほっと」を開所しました。これは、実習生による命案でした。



この「鈍川ふれあいサロン」ですが、福祉的には次の機能を意識して行っています。住民ニーズの発見機能。それから総合相談につながる相談連結機能。そして専門相談への対応や支援活動のための介入機能などです。地域のスタッフ達は地域住民のことを良く知っています。「あそこのおばあちゃんが最近退院してきた」とか、「入院した」とか。「詐欺にあっているのではないか」とか。また、「若いお兄ちゃんがずっと来ているよ」とか、「あそこは危ないよ」とか言ったように。ここはすごい情報の拠点になっています。そして、政策

鈍川ふれあいサロン

地域見守りネットワーク会議の実施

社協の社会福祉士は、鈍川ふれあいサロンボランティアスタッフと、日頃から地域内の気になる要援護者の情報やニーズキャッチに伴う会議を行い、必要があれば地域包括支援センター担当や行政に繋いでいます。特に、下記の機能を意識しながら行っています。

- ① ニーズ発見のためのネットワーク(住民ニーズ発見機能)
- ② 総合相談につながる問題発見のためのネットワーク(相談連結機能)
- ③ 専門相談への対応・支援活動のためのネットワーク(介入機能)
- ④ 見守りのためのネットワーク(見守り機能)
- ⑤ 政策や制度の改善につながるためのネットワーク(地域変革機能)



や制度の改善への提案に繋がっています。

ここには市長さんが来ます。なぜ来るかという、「しまなみ海道」はサイクリストの聖地です。サイクリストの街づくりとして市長さんが月に1回、鈍川温泉までトレーニングに来て、ここでお茶を飲んで帰るのです。

活動して良かったことは、地域のふれあいの場ができ、いろいろな人に出会えた。そのことで自分達も元気になれた。若い人達も参加していただき、交流に繋がったということです。

今、聖カタリナ大学と共同事業を行っています。フットケアや介護の先生方に入ってもらっての介護予防を行っていただくなど若い人達と地域が連携しているのです。そこを私達が支援していくという形です。これはカタリナ大学のユニフォームですが、大学生も自分達の大学をアピールしているということです。このような活動もしています。

活動して良かったところ (地域住民、ボランティアスタッフの声)

- ふれあいサロンやふれ愛茶屋(お店)が出来て地域の方が喜んでくれた。
- 地域の憩いの場(社会資源)が出来た。
- いろいろな人に出会えた。(町外と地元交流)
- 鈍川内の各地域を超えたつながりが出来た。
- 自分達も元気になれた。
- 自分たちも毎日サロンになっている。
- 若人の参加及び交流に繋がった。

カタリナ大学と玉川(鈍川)地域 との協同事業

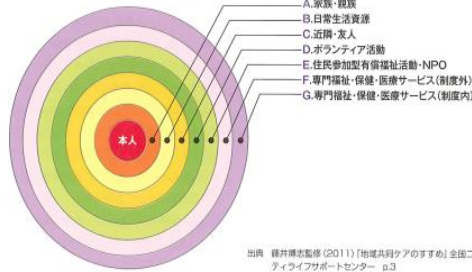
1. 学生と地域との「玉川の宝物探し」アクション
 - ・ 玉川地域「まちあるき」により社会資源の整理
 - ・ 住民座談会への学生参加 (6月28日実施)
2. ふれ愛茶屋 高齢者サロン活動の活性化アクション
 - ・ 介護福祉専攻学生(秋山教授の協力)の「ふれ愛のフットケア」
 - ・ 足湯体験・足マッサージ (10月4日・11月1日実施)
3. カタリナ大学 学園祭での出店
 - ・ 学園祭でふれ愛茶屋の模擬店を開き、玉川地域の名産品の宣伝販売 (10月25日・26日実施)
4. その他(玉川での行事支援及び参加) -カタリナ大学宣伝隊-
 - ・ 玉川グルメマラソンボランティア参加 (9月27日実施)
 - ・ 玉川福祉センターまつりボランティア参加 (11月15日実施)



地域福祉的に考えた時に、高齢者の中で要援護の人達をどのように支援をしていくか、私達、専門職だけでは解決できないので、地域住民に参画していただくということがすごく大事だと思っています。ここはレジュメにも付けさせていただきましたけれども、住民からの提案に対して、私達専門職がいかにキャッチボールをしながら充実させていくか、地域福祉活動に繋げていくかというプロセスをここに触れさせていただきました。

地域生活支援の視点 ①

図表1 高齢者本人を支える多様な社会資源



地域支援援助プロセス

住民からの提案	今治市社協玉川支部	結 果
①H19年7-9月の座談会において純川地区に「サロン」を立ち上げたい	・純川地域住民へのサロン活動の説明会 ・場所の選定協議・スタッフを募る ・ボランティアスタッフ15名で開設に向けての研修及び準備 ・運営補助金の調整 ・サロン研修、交流会の実施	・地域福祉 ・H20年7月22日に老人憩いの家を借りて、スタート 20か月に1回の頻度で実施
②純川地区では、H15年にJA支店(スーパー)が閉鎖となり、地域内に商店がなくなり、生活がしにくくなっている	・ボランティアスタッフ15名の中で、会議を重ね、生活課題を整理して目標を設定し、実践に向けてのアプローチを行う ・運営方法(費用)、スタッフについて、ファシリテートを行う	・旧JA純川支店を借りて、生活支援(兼向かえレストラン)の拠点として「ふれあい茶室」がH21年10月1日オープン ・ふれあいサロンとふれあい茶室の2つの体制で運営
③当初の座談会で出た意見として、県内外の老人(学生)の受け入れを行い、交流をはかりたい	・社会福祉士実習(相談援助実習)及び地元福祉大学との受入及び連携を実施調整	・通称に学生が来ることにより、交流人口が増え活性化に繋がった ・滞在型の生活体験実習により実践力の社会福祉士の養成
④マスコミ、広報で有名になりすぎて、地元の高齢者等が来にくくなった。	・毎日型のサロン開設に向けての相談支援を実施。実習生(相談援助実習)も、運営会議に参加して事業提案	・実習生の提案により毎日型サロン「ふらっとホッと」がH25年10月21日オープン
⑤ふれあい茶室がスタートして5年が経過する中で、現在の活動について地域の方々の意見や要望を聞いて今後の活動に活かしたい。(活動評価)	・コロナ大学と協働して、H25年12月に純川地域の住民にアンケート調査・住民座談会を行い、地域住民の意見集約を行う。	・H27年1月にアンケート調査・住民座談会の分析を行い、1月末にスタッフ・住民の方々に報告会の実施予定

それと、これは今治の商店街のど真ん中です。パチンコ屋を改造して「ほんからどんどん」という拠点ができております。ここの奥にサロンがあります。子供のサロンと高齢者のサロンもあります。商店街の組合の人達が中心になって、新しい拠点、サロンを作り、「新しいコミュニティをどのようにしていけば良いか」を考えています。「しまなみ海道」ができて、今治港の辺りはもう島に行く船がありません。「そこをどのようにしていくか」、商福連携ということでも私達と考えています。

商店街の福祉活動



(活動拠点：ほんからどんどん)

今治市中心街のドンドビ交差点(川をさかのぼって押し寄せる海水を呑んだり吐いたりする磯門＝呑吐磯に由来)から今治港にかけてアーケード街が伸びる。以前は、かなり活気があったが、しまなみ海道の開通による今治港への船便の減少や郊外型ショッピング施設の進出、市街地の大型店撤退による買い物客の減少で、以前ほどの活気はなくなっている。そのため空き店舗を賃し出したり、B級グルメ食堂・特産品販売店・集いスペースを集めた複合施設「まちなか広場 ほんからどんどん」を開設するなど買い物客誘致などを進めている。(H29年3月末)

○旧今治市人口 110,618人、世帯数 51,785世帯

※H22年12月に商店街組合からの依頼で、ほんからどんどんを拠点としてサロンの運営支援を社協で行っている。住民座談会や民生児童委員への調査等の実施。



(商店街での学びと地域福祉活動の方向性)

- ①中心街には、社会資源が充実しており利用できない社会的弱者を繋ぐ支援体制づくり
- ②マンションなどの集合住宅については、民生委員もかわりが少ない → 小地域での語りの場づくり
- ③小地域単位でのサロンの開発
- ④今治港周辺において、子ども～高齢者等が集え、「健康と福祉の輪」を意識した商店街づくりと商品開発(商福連携)
- ⑤商店街周辺の住民の暮らしを支える商店街づくり

最後に次のようにまとめさせていただきました。生活課題の把握をして、ふれあいサロンのような組織化をしていって、島では地域おこし協力隊の人達と新しいコミュニティを構築して、学生達にもどんどん入ってきてもらおう。今、島に定住してくれた成田さんは新しい農業を始めています。ロバを飼って肥料を作り、農業機械を使わないでロバに雑草を食べてもらいながら、農薬を使わない循環型農業の実践を行っています。また、成田さんは新しい住民としてのマネジメントを行っ

まとめ ①

地域福祉においては、住民の抱える生活課題を福祉ニーズとして把握し、その解決を地域の中で図ることで、住民の地域での自立した生活を支援していくことが重視されています。

今回の実践報告は、社会福祉士が地域支援(地域福祉活動)を行う中で地域住民の人々の生活課題を座談会等を通して丁寧にアセスメントを行い、その課題解決に向けて「住民主体の活動」として「地域福祉活動計画」により目標を立て、さらに「住民参加」により地域福祉事業として解決し活動実践を行ったものであります。

特に今回の実践の効果として、下記のとおり考察されます。

- ①地域の生活課題把握(座談会を通じて地域の生活課題の把握)
- ②地域組織化(ふれあいサロンスタッフにより活動実践、防災組織づくり)
- ③社会資源の開発(ふれあい茶室による新しい生活支援の拠点)
- ④個別課題へのアプローチ(地域ネットワーク会議の実践)
- ⑤福祉文化の醸成と次世代の地域福祉活動への参加(福祉教育実践)

てくれています。福祉文化の醸成と次世代の地域福祉活動への参加というようなことです。

島には社会資源がありません。それを新しく 0 から 1 を作り出す活動。さきほどの「ふれ愛茶屋」のようなサロンなどです。また、島の高齢者は災害をすごく気にしながら生活をしています。そこで、災害に強い福祉のまちづくり。ヤングオールド、65 歳の人達が 75 歳、80 歳、後期高齢者を支えていく。次世代の子供達が安心して生活できる街づくり。排除から包摂していく地域づくり。そのような

制度の狭間を埋める、しみいる地域づくり活動。最後に観光なども大事ですけれども、福祉でのまちづくりということも、すごく大事に考えていきたいと思っております。

すごく雑ばくな報告になってしまっ申し訳ないのですが、私の生まれ育った関前のフィールド、それから合併した後に、私が中山間地域の支部長を体験させていただき、今は今治福祉社協の地域福祉課長ということで、16 万 4 千人全ての地域福祉を支援していく立場での報告とさせていただきました。

ありがとうございました。

[本城]

ありがとうございました。今、島崎様から関前を中心とした離島と内陸部の玉川地区を中心とした福祉活動について、お話をいただきました。皆様からご質問等をお願いしたいと思います。

[原様]

香川大学の原です。どうもありがとうございました。お話の中で、しばしば大学が巻き込まれて行っているのが、とても印象的だったのですが、どういう経緯でいろいろな大学が巻き込まれて行ったのか、そこを教えてくださいませんか。

[島崎]

はい。このままではこの島々が無人島になってしまう、忘れられていく島になってしまうということで、やはり若い人達に島の魅力を伝えていかなければならないと考えたのが 1 点。それと、福祉の学生は社会福祉実習として 1 か月間、現場に行かなくてはなりません。社会福祉の立場の私からすると、この実習は通うのではなくて家を借りての滞在型の方が、学生達が島の人達と共に暮らしていく中で、地域の理解を深め、地域住民も生活に張りが出ると考えたのがもう 1 点です。このような滞在型の実習は日本で初めてではないかと思っています。

まとめ ②

1. 「0 (無)」 → 「1 (有)」 を創り出す活動
(例えば、サロン活動)
2. 「1 (地域資源)」 + 「1 (地域資源)」 = 3.4.5 (地域福祉力向上)
3. 災害に強い福祉のまちづくり
4. ヤングオールドがオールドオールドを支える
5. 次世代の子供達が安心して生活できるまちづくり
6. 排除から包摂していく地域づくり
7. 制度の狭間を埋める、しみいる地域福祉活動
8. 福祉でまちづくり

島の人達が来てくれて実習成果を発表するのですが、その時に提案するのですね。「実は、こういうものがあったら良いのではないか」と。今回も「伝言板を作って、島の人困っていることを皆で聞くようにすれば良いのではないか」とのアイデアを出してくれました。

実習の後でも、玉川鈍川の「ふれ愛茶屋」に行った川崎医療大学の学生が「彼氏ができたら連れてきたい」とか。また、悩み事があたら「ふれ愛茶屋」の人に電話をしているのです。要は関係性ができているということです。

きっかけは次の時代の島の活性化、活性化というところまでいかないにしても、どうやって文化を残して行くのか。それと学生にとってみれば、島の暮らしとか、知恵がとても大切な財産なので、それを伝えて行くという、そこをマネージャーとしての役割を果たすことが大事と思っています。

私は15年ほど前に広島国際大学の大学院に行かしていただき、広島国際大学との関係ができました。今、聖カタリナ大学に非常勤講師で行かしていただいております、そういった面でも大学との連携がやり易いということもあります。

実習は学生にとってもすごく勉強になりますし、島の人元になります。「今年も神輿をかけたね」とか。本当は神輿にタイヤを付けて転がしているのですが。神輿をかけない地域というのは悲しいですね。「それだけでも、すごく活性化になったのかなあ」と思っています。順序立てた返答にならなかったようですけども。

[本城]

その他にございませんか。

[北尾様]

香川県水産課の北尾と申します。よろしく申し上げます。今、お話を聞いていますと、島嶼部や過疎地の方が人と人との触れ合いがものすごく濃くて、特にお年寄りなどは生きがいを持って生き易いのかなという気がします。一方、高齢者で問題になるのは医療費や認知症などですね。全国平均と比べて、特に島嶼部の医療費が安いとか、平均寿命が延びるとか、そのような傾向があるのでしょうか。

[島崎]

伯方島などは要介護認定率が低いですね。島は社会資源が少ないので介護保険料の多少を言う時には気を付けないといけませんが。認知症については、小大下島などは少ないですね。「認知症になる暇がない」と言うのですよ。朝から夜まで全部自分でしなければなりません。朝ごはんを作らないといけない、畑に行かないといけないとか、自分の役割がしっかりあるのと、自治会の参加や、老人クラブなどでの役割がしっかりしているのです。ぎりぎりまで、ここで生活したいというので、やはり AND (Activities of Daily Living 日常生活動作) の自立度が高いと言われています。

生活の中では必ず畑に行きますので、それだけでも運動量になっていると思いますし、もう少し調べてみなければならないのですが、「高齢者の自立の違いというものがあるのかなあ」と思っています。それと、拠点がすごく大事だと思います。田舎の人でも喋らない人は喋らないので、このような拠点を意識していくということが大事だと思っています。

[一井様]

香川大学の一井です。先ほどのお話の中で移住者が出てまいりましたけれども、聞いているところによると移住者は定着率が低いとか、いろいろあるようですね。定着率の向上や移住者のいろいろな課題に対してどのようなことをされているのでしょうか。

[島崎]

はい。ありがとうございます。実はこのカフェを立ち上げた成田さんという方なのですが、成田さんは3年間市の職員として給料をもらいました。そのあと、どのようにして生活をして行くか。要するに経済的な基盤です。以前、成田さんは東京で小さな会社を経営していたので、その当時4千万円ぐらいの所得があったのが、今は1/10になったそうです。その成田さんは自分達でこのようなカフェとか、体験型の農業や宿泊施設をやっております。「経営基盤がしっかりできていないと、島では生活が成り立たない。それをきちんと計算ができて、やれるだけの力があるかどうか」ということをいつも言っています。今、成田さんの後を追って地域おこし協力隊が3人来ていますけれども、そのことを彼がいつも言っています。それと彼は自治会長になったり、消防団の団員になったりしています。このように地域活動にしっかりと参画しているかどうかということ。すなわち地域住民との交流がないとなかなか受け入れてくれないということがあります。このように、経済的に成り立っているということと、島人になれるかどうかということが大切ではないかと思っています。

今のところこの島に限っては、かなり覚悟をして来てくれている人達なので定着しているようです。ただし、「しまなみ海道」の大島とか、伯方島、大三島などは帰っているようなので、「このような小さな島に覚悟を決めて来られる方が定着するのかなあ」と思います。それと今、玉川地域の鈍川の方にも若い人が来てくれています。そこで新しい農業をやったり、炭焼きをやったりしています。そのキーワードは奥さんではないかと思います。旦那さんよりも奥さんが地域のコミュニティを好きになってくれたら定着率が上がります。私個人の感想ですが、ご夫婦で来ていて、奥さんが「この地域が大好きよ」という方の定着率がとても高いと思います。

[本城]

他にございませんでしょうか。

では、私からの質問ですが、最近、関前に訪問客あるいは観光客が増えてきているとい

うようなことはありませんか。

[島崎]

「しまなみ海道」の今治と尾道は観光客がどんどん増えています。「しまなみ海道」はサイクリストの街づくりとして、愛媛県知事が台湾などにセールスに行くなど県を挙げて取り組んでおります。一方、こちらの「とびしま海道」はまだまだです。御手洗や上蒲刈島の藻塩などが全国放送されたりもしているのですが、まだ観光ルートにはなっていません。このため、「ここでカフェをやっても稼げません」とはっきり言われました。「しまなみ海道」の方なら「カフェで稼げて飯が食える」そうです。今、道後温泉が女子旅ですごく人気なので、尾道から「しまなみ海道」に入ってくる観光客が増えているようです。

[本城]

ありがとうございました。他にございませんでしょうか。

[多田様]

地域通貨「だんだん」のことをもう少し詳しく知りたいのですが、おばあちゃんが病院に連れて行ってもらって現金ではなく「だんだん」を若い人に渡すと、もらった人はその「だんだん」をどのように使うのですか。

[島崎]

地域通貨というものは最後にお金に交換できたりするのですが、関前の場合は助け合いということを目的にしています。500円ほど出して会員になって、地域通貨を用いてボランティア活動を一生懸命やってもらいます。地域通貨が貯まれば、それをまた一生懸命使うという、地域の交流ということを目的として行っています。本来だったら、地域通貨を貯めたら商店街で安く物を買うことができるなど地域通貨に対する何らかの対価があると思うのですが、関前の場合はそれが難しいので、1年間終わったらマイアミにあるタイムダラーの本部から感謝状をもらうという、それだけの事にしています。

ですから、「だんだん」によって、困った時にはお互い様ということで助け合う形にしています。とは言っても、これが5年間の実験だったのですが、なかなかすっきりしませんでした。しかし、この精神が「きないや」や「サロン活動」に繋がっていると思います。要は「お互い困ったときはお互い様ですよ」ということです。田舎のおばあちゃんは若いお嫁さんによけいな事を言ったり、嫌なことを言ったりするのだけれども、そうではなくて「困ったときはお互い様だから優しくしてあげようね」とか、「お互いが家族になろうね」と言う、どちらかというところち系のツールとして、要は家族を作っていくようなツールでやっていました。

年金暮らしの人は金銭的な面もあって、こういうものがあれば安心して老後もお互いに

助け合えるのではないかというのが、本来の地域通貨の「だんだん」ですが、実験として行ってみたものの、なかなかそこまではいきませんでした。一時、地域通貨が全国的にブームになりましたけれども、今は下火になっていますよね。でも、この精神はすごく大事だと思います。今では島の助け合い文化というものがお葬式とか冠婚葬祭だけになり、こういったメニューはあまりないですよ。要は地域通貨の実験を通じて、お互いの助け合いを広めたかったということです。

地域通貨のおかげで、意外な出会いや意外な関係性ができました。僕もまさか、朝 4 時に起こされたおばあちゃんとこんなに仲良くなるとは思いませんでした。これはエピソードですけど、そのような人間関係を作るものはなかなかないですよ。このように地域通貨の実験を行ってみて良かったと思っています。

[本城]

もう少し時間が余っております。どなたかありませんでしょうか。

[大西様]

大西です。お世話になります。サロンの考え方について一つ教えてください。私はサロンが集う場ということで、とても重要な役割を果たすと思います。しかし、ただ集うということの上に、活躍するという役割がそこに付け加わらないといけないのではないか思っています。主催する人達には役割があると思いますが、では、住民の方々、特に後期高齢者の方々がそこに集って、お話をして、はい帰ります、それとても大切なことではありますが、その上をめざすということで、何か島崎さんのお考えがあればお聞かせ下さい。

[島崎]

鋭い質問をどうもありがとうございます。まさしくそういうことですね。役割ということが非常に問われるのではないかと思います。女性達は何となくお茶を飲んでワイワイできるのですが、男性達に参加していただくためには役割がなければ難しいのです。ですから、このサロンでは男性達に役割をお願いしています。ここの女性は鋭くて、役割がないと男性が来ないということを分かっているの、リーダーが高齢者や男性の全てに役割をお願いしています。鍵を開けてもらうとか、得意なことを指導してもらうとかです。このことが自然体で行えているのが、素晴らしいと思います。

それと、今、この人達は結構配当金があって儲かっています。「お金って大事だなあ」と思います。年金だけの生活の中で、ただ地域で楽しむというのではなく、それが何か役に立っていく、さっきの写真に 100 円市が出てきましたが、儲けるほどでなくてもそういったものが大事ではないかと思います。

もう一つは若い人に伝えるということです。特に男性は女子学生が来ると元気になって一生懸命に教えています。おばちゃん達も男子学生が来ると元気が出ます。これも役割で

すね。今までの地域の大事なものを伝え繋げていくということが大事です。また、儲けるまで行かなくても、これらの活動のための金をどうしていくのか。こういったことが、地域が輝いていくということでもありますし、人がたくさん来てくれるということに繋がります。

高齢者達にインタビューをすると「まさかこんなに県外の人と話すことになるとは思わなかった」とよく言われます。それと「同じ玉川鈍川に住んでいる人とこんなに深い話ができるとは思わなかった」と言われます。地域の人達であつても知っているようで、知らないということなのですね。この関係性を作るということがすごく大事だと思います。85歳の方と65歳の方とは、すごく年齢差がありますよね。この年齢差を超えて話している。それだけでもすごいことではないのかと思います。また、男性が後ろの辺りで一生懸命お手伝いをしており、その前で「お父さんの理解がなければ来ることができないので、お父さんに感謝しています」と女性が言っていました。そのような感じですかね。ちょっとお答えにならなかったかもしれませんが。

[本城]

どうも島崎様、ありがとうございました。